

---

# The Radicalアンドロイドータミネちゃんー

八紘新音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

The Radicalアンドロイド―タミネちゃん―

### 【Nコード】

N9962Y

### 【作者名】

八紘新音

### 【あらすじ】

1999年晩秋。名門私立高校に通う優等生、一条秀真の元に謎の、女は青い髪に銀色のコスチュームを見にまいった奇異な少女が現れる。そしていきなり一条に襲いかかってきた。自称――未来からやってきたアンドロイド――。そんな出会いに、一条秀真の運命は？これは優等生、エリート、そしてリア充中のリア充である主人公一条秀真が坂道を転がり落ちてゆく物語。ジャンルはSFチツクなコメディだと思えます。

## ブログ ―閉塞― (前書き)

SFのつもりで書き始めたがただのコメディーになりました。序盤はSFチックです。次第にエロコメ。最後はまたSF? うーんジャンルはSFエロコメディということで。主人公はまたしても変態です。↑ごめんなさい。

## プロローグ — 閉塞 —

なぜ、こんなことになってしまったのだろう。

こんな筈ではなかった。こんなことになるなんて、あの時は夢にも思わなかった。

取り返しの付かないことをしてしまった。後悔したところで始まらない。既に終わっている事なのだ。どうしようもない。あの時あすれば——などといったところで今更あとの祭りだ。

何故気づかなかった！

何故俺は、その可能性に気づかなかった。

ふっ、全く笑える。

俺は優秀だ。有能だ。天才だ。この世界を率いるエリートだ。

などと自惚れていたなんて。自分の愚かさに全く気づく事なく、それでいて「自分のやっている事は正しい、世のために正しい行いをしている俺は素晴らしい、人類の救世主たる資格をもった有能な人間の崇高な使命を果たしている」などと。

そう、俺はまりにも無知だった。馬鹿だった。愚かだった。何も分かっていなかった。

まさか、そんな自分の行いが。自分の居る世界を壊し、居場所を奪うなんて。

平和で穏やかだった日常はもう何処にもない。

最悪を招いた。全部俺のせいだ。俺があまりにも愚かだったからだ。

ただそれだけ。

それだけで、俺は友も、恋人も、家族も、皆失った。残されたのはひとり薄暗いコンクリートの部屋の中、太陽の光を浴びることさえ許されぬ場所だけだ。

五年だ。気がつけば三十を過ぎていた。とうにおっさんだった。

眼の下にはクマ、無精髭、髪も伸びっぱなしだ。視力もとうに落ち、眼鏡なしでは何も見えない。ボロボロの衣服に、煤けた白衣を来て、俺は連日連夜、狭いコンクリートの部屋の中で、くすんだ緑色の電子基板を相手に格闘した。

運命は一縷の希を与えた。闇に射す一寸の光だった。いや、悪あがきだった。

それでも俺はそれにすがりしかなかった。

運命を変えるため。

それは俺に残された唯一の選択だった。卑怯かもしれない、そんな事で俺の罪は許されはしないだろう。だが、それ以外、救われる道は無かった。

「どうか、無知で馬鹿だった俺の運命を帰ってやってくれ」

銀色のカプセル、人が一人すっぽり入れるくらいの大きさのカプセル。中央部にはガラスの窓を備え付けてあるが、今はガスが充満していて中身は見えない。

それを部屋の隅に立てかけている。見た目は日焼マシーンそのものだ。いや、日焼けマシーンを改造して作ったのだから、そう見え

るの当然だ。そんな雑なもので、自分の行った過ちを取り戻そうとするのだから笑える。

「頼んだぞ」

「マシンは何も言わない。当然だ。これは機械でしか無いのだ。」

俺はマシンの隣に置かれた、小さなノートPCの画面を確かめる。

「2014／11／03／23..12 To 1999／11／03／23..12」

”ENTER”

俺はボタンを静かに押す

直後、マシンは脱水時の洗濯機のように、大きく揺れだす。

そして放電を上げる。爆発音と共に、凄まじい光を放ち、マシンの中身は過去へ送られた。

「ふふ、これで俺もやつとお前たちのところへ行けるな」

俺の全身から力が抜け落ちる。

冷たい床に煽れた。ぼやけた視界に、ホコリっぽい床の上に転がったいくつモノ小さなネジが見えた。

少し眠い。ゆっくり休もう。

俺は瞳をゆっくり閉じた。

もう、思い残すことは、何も無い。俺の役目は十分に終えたのだから。

一九九九年、十一月三日。

僕、一条秀真、高校二年生17歳は予備校での自習を終えて、閑散とするロビーを歩いていた。

時刻は十一時十分前。ビルを出ると、冷たい風が吹きつける。学ランのボタンを閉じる。昼間は暑く感じたそう寒くは感じなかったが、さすがにこの時間になると冷える。薄手のコートでも持つて来るべきだった。

少し駆け足になる。ビルとビルの間、飲食店のネオンサインは既に消えていて、頼りない街灯と通り過ぎる車のヘッドライトだけに照らされた薄暗い夜道を歩き、駅へと急ぐ。

携帯をポケットから取り出す。手にとって折りたたみ式の画面を開く。今年発売されたばかりの新機種でこういった折りたたみ式のものはまだ珍しい。

白黒の液晶画面には着信アリを記す表記があった。相手は「百里坂仁絵」だった。

「しまった」

思わず声に出した。今日、連絡すると約束していたのだ。だが、つい勉強に集中するあまり——それも大学受験ではなく、ロピタルの定理という大学レベルの数学をやっていたのだが、あまりに面白く、つい熱中するあまり——僕は彼女との大事な約束を忘れていた。彼女はおしとやかで、気立ての優しいお嬢様だ。そんな彼女が、こんなことで一々腹を立てることはないだろう。むしろ心配しているかもしれない。だから余計に思う。悪いことをした。

僕は一瞬コールを押そうと思った、携帯を閉じた。時間が時間だ。こんな夜更けにベルをならすのはいくらなんでも非常識だ。まして、彼女の父親は厳格だ。男からの電話というだけで不機嫌になるとい

うくらいなのだから。

「いいの。でもちよっと心配しちゃったな私」

なんて言う、仁絵の姿を思い浮かべた。

さらりとした長い黒髪を少しウェーブさせ、いつも後ろで大きなリボンを結んでいる、そんな彼女が、小顔でひとときわ際立つ瞳、潤ませて、桜色の唇を噛んで、僕の事を覗くのだ。

僕は後頭部を掻いた。実際に今、会っているわけでもないのに、照れてしまう。そんな彼女を、僕はたまらなく愛おしく思っているだ。

付き合って二年近く。高校入学と共に付き合いだした僕らはいまだに手さえロクに握らないが、こうして心は通じ合っている。

そんな彼女を心配させたかもしれない。そう思うと、ちよっと罪悪感に苛まれた。

列車の中、英単語帳に目を落としていた。内容は既に全部暗記している。1900語なんて、一年の内に覚えたいし、例文も去年までに完璧に暗唱している。英語で苦手なのは発音くらいものだ。当然入試には関係ないので、全く問題ない。

そう言えば、再来週校内模試だっけ。顔を上げた。不意に、揺れた中吊り広告が目に入った。

「ノストラダムスの大予言、真実実！人類滅亡は七月ではなかった！」と、週刊誌の仰々しい煽りを見て、ため息を付いた。さっきとは違った種類の。

全く、いつまで終末論で稼ぐつもりなのだ。そんなガセネタに踊らされて散在するバカもバカだが、それを飯の種にしているってのもなんとも滑稽だ。そんな事をしている暇があったら、この国の未来についてどうすべきか、それを特集して、国民に投げ変えてはどうかそのほうがよっぽどためになるし、それが本来、マスコミに与えられた役割というものだろう。



僕は単語帳を鞆にしまう。短い黒髪（眉の上、耳にかからぬという校則を忠実に守った）を描き上げ、そして心のなかでつぶやく。「僕達が若い奴らが何とかしないと、未来は絶望的だ。だから僕は官僚になる。そして、この国を中から変えてやる。それが僕の使命だ」

本気でそう思っていた。だから、文転した。志望校を東京大学文科一類にしたのだ。夏休みまでは、IT業界に行くつもりで、理系を志望していたが、いくら技術を身につけても、それで世の中を変えられるとは思えない。一企業に貢献できても、社会全体にはその影響は及ばない。そう結論付けて、僕は進路を変更することにした。

列車が終着駅にたどり着く。ニュータウンに作られた、真新しいホームに降り立ち、エスカレータで上がって、改札口をでる。テナントもまだ少ないガランとした駅舎から、街の人口に対して不釣り合いな片側三車線の大通りを歩いて、自宅を目指す。

駅からはそんなに離れていない。だから徒歩できている。駅前の駐輪場は有料だからだ。

このあたりは予備校のある都心と違って、車も殆ど通らない。街灯も少ない。女だったら絶対親に送迎させているだろう。最も、人口がまだ少なく、田舎とまでは行かないが治安を心配する必要はない。変質者が出たという話も聞いたことがない。

地図上にしか存在しない四丁目、近々マンションが建設されるらしい更地。遮るもんがないせいで風が余計強く吹きつける。自然と足が早くなる。

早く帰って、風呂に入りたいな。ああでも、風呂温めないといけないから、その間はクーヒーで我慢するしか無いか。

交差点、道路の向こうには最近立ったマンションが並んでいる。僕の家はその区画の端に立つ公営住宅だ。いつも横断歩道をわたっても家に辿りつけるが、信号待ちが嫌いだった。だからいつも、少し離れた場所にある歩道橋を使う。

歩道は更地に沿って続く。僕は歩道橋目指して歩いてゆく。歩道橋の階段を上がる。空き地と空き地を挟むよう作られたせいで、階段の白いタイルは土砂で汚れている。そのせいで気を付けないと滑ってしまふ。ゆっくり階段を上がった。

——バチッ！

何か音がした。何だろう？僕は顔を上げた。すると青白い光が見えた。

静電気の放電か？電線が切れたのだろうか。

歩道沿いの電柱を確認する。周囲の街灯を見渡しても停電した様子はない。切れた様子はなさそうだ。

不思議に思い、階段を急いで駆け上がる。橋の上に降り立って、周囲を見渡す。

対岸は団地の敷地だ。反対側は建設予定のマンションに続く道だ。まだ金網で閉ざされている。完成すれば四丁目を経由する形で駅へ直結されるらしい。

「何だ？」

金網の向こう。道の真中、何かが光った。

金網に近づいて向こうを見る。バチ、バチッ！青白い閃光が数回走る。静電気の放電のような光。それが光が数回、道の真中で。徐々に円が描かれる。人一人すっぽり収まるくらいの、円。いや、球体が出現した。

中央から閃光が走り何か像を結ぶ。

あまりの光に、驚いて一瞬まばたきした。

すると、そこには人影がポツンと佇んでいた。僕は目を凝らす。たしかに、この空き地では夜遊びをしている若者がたまにいるのだが。いや待て、さっきまで人なんて居なかった。どうやらそのたぐいではないらしい。騒ぐ声もしないし全くしない。

「????」

影がゆっくり近づいてくる。シルエットが少しずつあきらかになる。女だった。

僕は眉をひそめた。女は少しずつ歩調を速める。

「――成功。ターゲット補足。これより作戦を開始します」

はっとした瞬間、女は地面を蹴り駆け出した。そして金網に激突し、吹き飛ばす。僕は慌てて後ろへ下がるが、バランスを崩し、尻餅をつく。女は倒れた金網を踏み込んで近づいてくる。街灯がちらり女を照らす。

そこで改めて異様さに気づいた。

まず髪、とても日常生活では目にするものがない、透き通った蒼。光を反射しているような髪。長さは腰の少し上くらい。両サイドに天使の羽を模した小さな髪飾りをしている。

そして格好。全身が銀色、肌にぴっちりくっついた、胸の形がくつきり、はつきりしたプラグスーツに、軍服か警備員の服のよう、ポケットがたくさんついたジャケットを羽織って、が学生服のようなテクテクしたプリーツスカートを、両手にはギアのようなものがついた手袋、足にはニーソックスを、踵の部分に大きなネジがボルトのついたブーツを履いている。

まるで未来人とも言わんばかりの、あるいは高度に文明が発達した星からやってきた宇宙人のようなSFチックな格好だ。

映画の撮影？

いや、こんな田舎で、しかもこんな時間にありえない。

歳は自分とそれほど離れているようには思えない。少女と表現すべきだろうか。

僕は腰を上げ、少し後退りしながらも少女の顔確認する。うつむいていて表情は見えない

「ミッションを直ちに実行致します」

少女はつぶやく。

「――は？」

思わず疑問を声に上げる。だが次の瞬間、少女はぎらり光る何かを両手に構えた。

刃物だ。刃渡り三十センチ、先が尖っている。普通の包丁のように

背の部分が湾曲しておらず、背の部分で刃面へ切り落とされている。少女は、地面をける。僕の元へ一直線。そしていきなり斬りつけた。

ぎょつとして、身体を回転させ避けた。刃物が頬をかすめる。指を当てると、赤い血で濡れてた。キズは浅い。が、掠った感覚が殆ど無かった。切れ味が優れ散る証拠だ。だとすれば、こんなものをまともに食らってはひとたまりもない。僕は瞬時に理解した。

少女は回れ右九十度。そしてまた襲いかかった。僕はなんとかかわし、そして走る。

カンッ！と、金属音になる。少女の刃物が手すりを叩いた。

走りながら振り向く。少女がゆっくり方向転換をして、また地面をける。走って追ってくる。

なんだ！？何なんだあいつ！

何で襲ってくる？

何考えてんだ！！頭おかしいだろあいつ！！

そうだ警察！

慌てて携帯をポケットから取り出す。走りながら携帯を開こうとするが、うまく開けない。

「畜生！！カッコ付けて折りたたみ式なんかにするんじゃないか！！」

諦めて再びポケットに仕舞う。全力で走る。団地の敷地に踏み込む。自宅のある三棟は反対側の一番端だ。駐車場の、車の間を蛇行し、フェンスを超えて、途中敷地を遮る道路を駆け抜け、三棟までだどりつく。家があるのは四階、息を切らしながら階段を一気に駆け上がった。慌てて鍵を開け、玄関経飛び込み、扉を即時に締め、鍵をかけチェーンをした。

ドアを背にしたまま、しばらく息を整える。

「何だあれ……」

先ほどの光景がフラッシュカットのように蘇る。水色の髪、天使の羽を模した髪飾り、銀色の装束。そして鋭利な刃物。

そういえばこの間、通り魔事件があったよな。そのたぐいか？

覗き窓から様子を伺ったが、誰かが上がってくる様子はない様だ。ゆっくり、静かに靴を脱いで、部屋へ上がる。玄関の向かいが自分の部屋だ。明かりは付けない。薄明かりを頼りながら（家の前は小学校のグラウンドであるため外の光は弱い）部屋の奥の窓へ。ベランダへ出る。身を屈め、慎重に。鉄柵から下の様子を伺った。車だけで人影はない。どうやら追って来なかったようだ。部屋へ戻って、ほっと胸を撫で下ろした。

翌日、通り魔には遭遇しなかった。今朝のニュースを注意深く観たが、近くで通り魔事件が起きたという報道はなく、登校中もあの少女は襲って来なかったし、そういう物騒噂は聞かなかった。

昨日と変わらぬ日常だった。家族と朝食をとって、電車に乗り、登校する。――名門私立、清王学院高等部、特進科、難関大選抜クラス二年A組――僕の通う高校まで何事も無く無事にたどり着いた。頬の傷がなければ夢だったのではないかと思えるほど平静だった。教室に入って席へ向かう。男子校であるため、男子しか居ない、むさくるしい教室。

「おい、どうしたんだよその傷」

「あ、ちよつとな」

話しかけたのは十三健介。小学校の三年時、この街に越してきた時からの付き合いで、PCが得意な理系志望のクラスメイト。夏休みまでは同じ方向を目指していた良きライバルだった。

彼は結構チャライやつだ。校則を無視して髪を若干染めているし、制服もちよつと来崩していて、シャツを出している。そんな訳で教師受けはあまりよくない。しかし、頭はずば抜けていい。大して勉強しているわけでもないのに、成績は常に上位10番以内だ。

「ようよう、一条。この間の校内模試またトップなんだって？ すごいな」

と、そこへ千宮芳雄が割り込んできた。彼とは高校になってからの付き合いだが、常に成績を競い合って、それでいて一度も僕に勝たない癖にやたら突っかかってくる嫌なやつだ。

医者の家系で、志望は東大理科三類だった。成績も校内では僕に続く。そしてなにより美形だ。腹が立つくらいあい端正な顔立ちをしている。校則で髪は耳の上、眉にかからぬ程度と決められているのに、はやりのスタイルをしている。が、教師は咎めない。親が物凄

い寄付金を収めているかららしい。金持ちで、成績優秀、そして美形。とにかくムカツクやつだ。

どうやら僕が志望を変更したことが気に入らないらしい。僕と成績競争ができなくなった事を、勝ち逃げしたと、目の敵にしているのだ。だから試験があるたびにこうして絡んでくる。朝っぱらから、わざわざ隣のクラスから。最近はい前にもまして余計に突っ込んでくる。本当に鬱陶しいやつだ。

「別に」

僕はそっけなく返答する。十三は助けてくれない。そういやコイツが千宮と話しているところを見たことがない。千宮は彼のことを下級市民と言っていた。十三もいけ好かないやつだと思っているのだろう。彼は、興味なさげにカバンの中を探り、漫画を取り出した。「さすがだな。これだったら理三も余裕だろう？」

「僕は文系なんだ、理系の君には敵わないよ」

「そんな事ないだろ。何だったら今から理系に戻れよ。そうすりゃ、お前も国内最難関を目指せるぜ。そのほうが将来のためだろ？」

「生憎、そっちには興味ないんだ。もう」

「そうか、そりゃ残念。けどよ百里坂さんの両親はそれでいいって言うのか？ まああの家は弁護士の家計だからな、法学で後を継いでくれりゃいいと思っているんだろうが、ああでもあの家、あんまり頭の良くない兄がいるんだってな。確か去年浪人して国立すべって結局今、某有名私大に通っているとか、同じ方向で、自分の息子より学歴高いと鼻につくんじゃないか？」

「あいつのことは関係無いだろ。それに僕らはまだそんな関係じゃない」

こいつも、仁絵に気があるらしい。僕の事をライバル視するのはそれもあるのだろう。だからわざと言ってやった”まだそんな関係じゃない”と。

「そんな関係じゃない……っか」

千宮は舌打ちをする。腕時計を確認して、教室を出ていった。

やれやれだ。毎回毎回、本当にご苦労さんだ。

「ところでよ。あれはどうなった？昨日メールしたんだぜ」

千宮がいなくなつて、十三は漫画をしまい僕に話しかける。

助け舟くらい出せよ。

「ああ、ごめん。昨日はちよつと遅かったから見てないや」

「そうか、まあいいけど。調子はどうだ？」

「やっぱ難しいな。音声の認識がどうもうまくいかない。テキスト入力にしたほうがよくねえか？」

「それだったらあんまり意味ないだろ」

「だよな」

「まあマットのことだからなんだかんだでやってしまふんだろうけどよ。期待してるぜ」

マットというのは僕の中学時代からのあだ名だ。「秀真」をひっくり返してマシユー。英語圏でマシユーはマットの愛称で呼ばれることから、そうなった。

よく考えると、いや、よく考えなくても、とてつもなく恥ずかしいあだ名だ。

「でよ、お前なんで文一なんだ？今時ITだぜ？アメリカのドットコムバブル知ってんだろ？これからはコンピュータの時代なんだし、お前の腕なら十分プログラマーとしてやっていけんだからさ、官僚志望なんてやめて俺と一緒にさ」

「お前も千宮と同じ事いうんだな」

返事はそれだけしかなかった。そうかもしれないが、それで何が出来るっていうんだ。たとえ”人工知能”なんてものが作れたとしても、それで世の中の構造が変わるわけじゃない。

とても鼻につく気取った言い方をするけど、要するに、所詮僕らは人間はアリストテレスがいうよう「社会的動物」なんだ。だから、社会の仕組み、基板、つまるところ法律を変えない限り、何も動かない。技術的なイノベーションでは何も変わらない。それが僕の持



論だった。もちろん、プログラマー志望である友人に向かってそんなことは言わない。

「まあ、趣味程度では続けるつもりだからそのへんは心配するなよ」「ホントか！助かったぜ！お前はやっぱりいいやつだな！親友」

「ああ、ありがとうよ」

十三は立ち上がり、僕の肩に腕を回して耳元で囁く。

「そうそう。お前に頼まれてたやつ」

十三はカバンにB5サイズの少し厚みのある封筒を素早く押し込める。チラリ見たがそれが何か瞬時に理解した。

「しかしお前もマニアックだよな。正直この趣味は理解できねえぜ」「馬鹿！こんな危ないもの学校に持ってくるんじゃない！」

僕は声を潜めていった。はっきり言って、かなりヤバイ物だった「我が家にはエージェントの影が忍び寄っている。よってこいつの長期保管は難しい。誤解されると嫌だからな」

「せめて、予備校で渡してくれよ。これを一日持ち歩かないといけない僕の身にもなってくれ、命が縮む思いだ」

「俺だってこんなヤバイものいつまでも手元においておきたくないぜ。お前の頼みだって言うから、わざわざ調達したんだ。ちつとはこっちの事情も考えてくれよ」

「そうだけどさ」

チャイムがなる。じゃあな。十三は自分の席に戻ってゆく。教師がやってきた。ホームルームが始まる。カバンの中を、誰にも覗られないよう、慎重に確かめた。

確かにヤバイ物だった。見つかったら即人生終了だ。こんなものを預けやがって。全くとんだ悪友だ。

出席の後、宗教系私立高校特有のお祈りタイムが始まる。その間考える。続きのコード、十三からの預かり物の保管場所。仁絵への連絡。そして昨日の通り魔。

ったく。なんなんだこの混沌とした状況は。

放課後。

今日は予備校の授業は無い。いつもなら予備校の自習室に直接向かのだが、昨日、仁絵から連絡をもらっていて、返事していなかったでそれが気がかりだった。なにより、こんな危ない物を抱えて外をうろつくのは危険だ。今日のところはおとなしく家に帰るのが懸命だ。僕はそう判断して、友人たちは皆、一斉に予備校に向かうなか一人帰路に着く。

電車の中で考える。仁絵は今日、家に居るだろうか？彼女と受験生だ。家に居ないかもしれない。まあ、夕方までに電話すれば彼女の父親が出る可能性は低い。おばさんに伝言を頼んでおけばいいが、怒っていたらどうしよう？

駅を出て夕暮れの道を歩く。地図上しか存在しない空き地にそう、無駄に広い歩道。まだ明るいというのに、人通りの少ない道を歩いて、自宅を目指す。

ほほの傷を触れる。昨日の女は一体何だったんだ。

交差点に差し掛かって、歩道橋へと続く道の先を眺める。なんとなく、歩道橋は避けたい。少し大回りになるが、違う道で帰ろう。そう思って、信号を待った。

「お待ちしておりました」

背後から声がした。ぎょっとして振り向く。するとそこには……昨日の少女がいた。

昨日と同じ、SFチックな未来的な銀色のファッションをしている。夕陽に照らされて輪部がオレンジに染まっているものの、蒼、いや水色というべきだろうか。けれどもキラキラと輝く長い髪を揺らしながらこちらへ近づいてくる。

「申し訳ございません。日没を待つべきでしたが、電力が後残り僅かです——」

少女は告げる。抑揚のない声だった。誰と話しているのだろうか。僕は眉をひそめる。

少女を一瞥する。昨日は暗くて見えなかったが、人全体的に綺麗に整った顔立ちをしていて、なかなかの美人だった。いや、整いすぎている。むしろ機械的だ。本来なら美人というよりもむしろ可愛らしさを感じさせるタイプかもしれないが、表情が、整いすぎている。というか、造物のように思えた。その格好のせいかな、まるで人形のようにさえ思えてしまう。なにより、その光彩が、瞳が青白く光っているのがとても非人間的だ。そんな印象を与えた。

少女は、ゆっくり歩み寄る。僕は振り向いたまま固まって動かない。

「――ですのでミッションを直ちに実行します」

言って、少女は刃物をギリリ光らせた。

「!？」

間髪入れず少女は刃物を突き出す。慌ててスクールバッグを差し出した手にする。

カバンは切り裂かれる。教科書、参考書、そして十三に預かった”物”が、散乱する。

マズイ。教科書には思いっきり名前が書いてある。しかも生徒手帳も入っている。このままでは名門私立清王学院三年A組一条秀真が、持ち主だと判明してしまう。第三者に知れ渡ってしまう。そうなれば生命の危機だ。

慌てて拾い上げようとした。だが少女が、それを踏んだ。カバンを拾っても無駄だ。教科書があちこちに散乱しているのだ。自分が関わったという証拠隠滅にはならない。仕方がない、ここは一端逃げるしかない。僕は”物”を諦めて踵を返す。そして走る。

少女は、追ってくる。物騒な刃物を両手に握ったまま追ってくる。全力では走る。

「ななな、何なんだお前は！」

フェンスを超えて、空き地へ入った。若干、高台になっている。三メートル程の高さ。むき出しの土の坂を必死に駆け上がり四丁目へと逃げこむ。

少女はフェンスをそのまま弾き飛ばした。そういえば昨日も、金網を吹き飛ばしていた。見た目は華奢なくせに脚力は相当にある。いや、おかしいぞ！？いくら何でもコンクリートに突き刺さった鉄柵だぞ。化け物か！

くそう。逃げるしか無い！舗装されていない更地の地面を蹴り、そして走る。夏までサッカー部に所属していたのだ。だから体力には自信はあるし、それなりに速く走れる。全力で走れば、男と女。追いつかれないはずだ。

しかし、その目算は大きく外れた。かなり走ったというのに、少女はまるでスピードを落とさない。

対して、僕は息が上がり始める。建設途中の道に差し掛かった。先をいけば、団地の敷地へと続く歩道につながる。そのまま家を目指して走る。フェンスは倒されたままだった。そのまま駆け抜け、歩道を渡り、団地の敷地へ。少女は未だ追ってくる。

どうやらただの通り魔ではなさそうだ。そういやさっき「お待ちしておりました」とか言ってんな。てことはあれか、あいつは僕を狙って？でも何故だ！

団地の敷地に入る。自転車置場を通り過ぎ、植木に隠れるよう走り続ける。このまま端まで走れば家にたどり着く。

しかし！

「今日は逃しません。もう時間がありません」

行く手を阻むよう、少女が立ちはだかる。

先回り？一体何故！？

地面を蹴り弾丸のスピードで少女が突進してくる。両手の刃物を前に付き出して。そして、斬りつける。学ランが破けた。冬場だったのが幸いだ。夏だったら確実にやられていた。

僕はちぎれた学ランを脱ぎ捨て、マフラーを投げつける。視界を遮って、逃げる。

「畜生！！」

駐車場の車を縫うようにして、隠れながら逃げる。警察だ。警察に通報しよう。そう思うい携帯電話を取り出そうとする。しまった。カバンの中だった。

「無駄です。私にはあなたの場所がすぐわかります」

セータを投げつける。少女はそれをあっさり払いのける。

「二度も同じ手は食いません」

刃物が飛んできたが、狙いが外れた。少女はゆっくり方向転換して、また追ってくる。

その隙にまた逃げる。なお、追ってくる少女。しかも早い。既に息切れして、速度の落ちる僕にあっという間に追いつく。やけくそにワイシャツを脱ぎ、中に来ている綿シャツも脱ぎ、それらを投げつけながら上半身裸のになってひたすら走り、逃げる。

「大人しくして下さい。そうすれば苦しまずに済みます」

「冗談じゃねえ！なんなんだお前は！」

背後から刃物が切りつける。

ベルトを切断した、ズボンがずり落ちる。足がもつれそうになる。靴ごと脱いで捨てた。

ついにパンツ一丁になった。僕は白のブリーフを愛用している。したがっていま、白ブリーフ一枚の状態になってしまった。

マンションの敷地を精一杯、全力で走る。階段の下で井戸端会議を敷いてるおばさんが黄色い悲鳴を上げる。車のボンネットで日向ぼっこしていた三毛猫が毛を逆なで威嚇する。

敷地の端までたどりついた。僕の家のある棟だ。

階段を駆け上がる。最後の力を振り絞って、四階までがり、家の玄関へダイブ。

ドアを背に、覗き窓で様子を伺う。息が整うまでしばらく待っていた。追ってくる様子はない。うまく巻いたか。昨日と同じだった。まるでデジャヴだ。

少し落ち着いて、靴を脱ごうと足を拾い上げる。しかし靴下だけ

だった。

しまった！パンツ一丁（白ブリーフ）、靴下。親に見られたらヤバイ。早く上がらないと。

「お、お兄ちゃん……」

廊下に、妹がいた。一番下の妹。七歳年下の十歳、小学三年生の女の子、一条理沙。栗色の髪を二つくりにして、クマのぬいぐるみを抱いている。パチリと大きな瞳で不思議そうに僕を凝視した。

「ママー！お兄ちゃんが露出狂！」

叫びながらリビングへ消えてゆく。

「露出狂って。そんな言葉いつ覚えた……」

しかし、確かに露出狂だ。

と、とにかく……母親が飛んでくる前に、部屋へ急ごう。

部屋へ上がって安堵。昨日と同じならこれ以上襲ってくることはないはずだ。

「しかし一体何だったんだあれは？昨日といい、今日といい……」

僕に個人的な恨みでもあるのだろうか。

いやしかし、男子校である学校はもちろんのこと、予備校でも、中学の時の同級生にもあんな奴は居なかったし、第一僕に恨みを抱く人なんていないはずだ。なぜなら僕は優等生だからだ。素行の悪い不良連中とはわけが違う。

そんな事を考えながら服を着る。それから、一応念のためベランダから下の様子を確認しておく。窓へ近づく。カーテンを開ける。そして、ベランダへ出ようと、鍵を開ける。

すると、窓の外、ベランダの向こう。少女が居た。浮いている。いや、正しくはジャンプして、この高さまで飛んできたのだ。少女はベランダのフェンスに手をかけたところだった。

「嘘だろ？四階だぞ！」

頭が真っ白になった。まさに思考停止。一体なにがなんだか分か

らない。

少女はベランダに降り立った。慌てて、ベランダの窓を施錠する。が、遅かった。少女は窓を開け放ち。部屋へ上がってくる。ご丁寧、ブーツを脱いでから。

「予想よりバッテリーの消耗が激しかったようです。日暮れを待つべきでしたが、急がないと活動停止します。ですので申し訳ございません。只今実行させていただきます」

少女が、両手に持った刃物を振りかざす。

「ちょ待ッ！」

左手の刃が壁に刺さる。少女の手から離れ、床に落ちる。見ると、それは包丁のようだ。ただし、その辺のホームセンターで売っているような安物ではなく、伝統工芸品という感じの高級感漂うものであった。

「切付柳刃と言います。主に関西で使われる柳刃の包丁で、先端を一寸カットすることにより引きやすくなっております。刺身を切るにはうってつけの包丁です。切れ味抜群。痛みを感じるまもなくあの世に行くことができます」

少女は説明すると同時、包丁を拾い上げる。

「安心のMade in Japan。今回は二本セットでお値段なんと39800円（税込）！！更に今回はまな板をお付けして——」

「いらねえ——！！」

少女は包丁を突き出す。僕は参考書や教科書を投げつけながら後ずさりする。

幾つかあたたったが、少女はまるで痛むようすもひるんで目を瞑る様子もなく、ゆっくり近づいてきて、一端引いたの後、また包丁を突き出す。

「おおおお、お前なんなんだ！」

「一条秀真。あなたは死んでもらいます」

「な、何故僕の名前を知っている！お前何者だ！自己紹介ぐらいしろ！！」

「これは失礼しました。申し訳ございません」

「はっ！？」

何故か少女は、包丁をジャケットのポケットにしまう。そして、銀色のスカートの端を両手で摘むと少したくし上げ、それはすなわち、その細くて白い膝が、太ももが、少しずつ顕になり、あと少しでパンツが見えてしまうという、ぎりぎりのラインまでスカートが上がり、それはそれで本当に優美で、美しく、芸術的と言うか、なんとというか、煌煌とエクスタシーを感じさせる、なめらかな曲線で、僕は包丁で命を狙われているという、こんな異常な事態をすっかり忘れて、というっかり、その艶めかしい曲線を凝視してしまったのだった。

「これ以上は有料です」

「いくら？」

「二千元」

僕は本棚の上に置かれた財布を手にとったそして中身を確認した。

夏目漱石（千円札）が一枚しかなかった。残念。

「いや、いい」

「かしこまりました」

少女は軽く頭を下げる。そして告げる。

「私はタミネ・LS・エール。機種名PC-9821 LS150  
エール。正式名称、プロジェクトタミネ初号機 エールLS150  
／SS model A 零式。通称名、タミネ。そして私はあなた<sup>ターミネイト</sup>の人生を強制終了させるため2014年の未来から派遣されたアンドロイドです」

「はい？」



ギヤグのつもりだろうか？ ネタなのか？ あるいは頭が本当にイカレている狂気犯罪者なのか？

” あなたの人生を強制終了させるためにやってきた”  
ターミネイト

とてもまともな思考の持ち主とは思えない。どう考えてもヤバイやつだ。一刻も早く、この自体を打開しなければ。

しかし、それにしても何故、僕の名前を知っている？ 一体何者なんだコイツは……

「では続きを」

自己紹介を終えて、少女は、端をつまんだ指を解く。銀色のスカートがニュートンの法則に従い、ゆっくり落ちてゆく。優美でなめらかな曲線が、銀色の幕の向こうに消えてゆく。そして、自称アンドロイド少女はジャケットのポケットに突っ込んだ包丁を取り出そうとする。

「チョチョチョ！ ちょっと待て！」

「何でしょう？」

「何でしょうじゃねえ！ お前は一体何なんだ！」

「私はタミネ・LS・エール。機種名——」

「さっきと同じ事言っただけじゃねえ！ なぜ僕に付きまとうんだ。そしてお前は一体何者なんだ。あ、自己紹介はもういいぞ。お前が何の目的でこんな真似しているのか聞いているんだ」

少女は、手を止める。

「私はあなたの命を奪うためにこの時代に派遣されました」

言い終えて、少女はまた包丁の柄を握ろうとする。

「待て待て！ まだだ！！ まだ質問は終わっていない！」

「かしこまりました。なんなりとお申し付け下さい」

どうやらアンドロイド、つまりロボットキャラを本気で演じてい

るらしい。だから質問には答えなければいけない？そういう設定なのか。なら助かった。こうして会話をしている限り、コイツは攻撃をしてこないのだから。

かもしれない……

「君、アンドロイドだといったな。人間じゃないのか？だったらその証拠を」

「かしこまりました」

自称アンドロイドの少女は、ジャケットを脱ぐ。

肌にぴっちりくっついたプラグスーツが顕になった。胸の輪部が強調される。鎖骨がくっきりして浮かび上がっており、肩、二の腕、肘、そしてくびれ、へその窪みが、妙なエロさを感じさせる。

学内ナンバーワンの優等生。高校二年生。男子校にしながら、県内一のお嬢様学校に通う、百里坂仁絵という美人の彼女を持つこの僕が、しかし手を握る以上のことは未経験な一条秀真は深くにもたったこれだけの微エロで顔を赤面してしまうのだ。鼻血が出そうになった。

すこし目線をそらすふりをしながらも、横目で凝視する。

少女は右腕の、ちょうど肘のあたりから、プラグスーツの一部、いや、手袋と一体となった部分だろうか。それを脱ぎ、肌を顕にする。

綺麗な肌色だ。色白で、きめ細やかな、肌。モデルの腕、理想的な、けれどもやはり何処か造物ぽさを感じさせる細腕だった。

少女は僕に魅せつけるよう前へ差し出す。そして左手で先ほどの包丁を持つと、

「ちょっと待って何をする！」

「某映画ではこうやって表皮を剥がし、金属によって作られた骨格を露見させることにより、自身が造物であることを証明していましたが、なにか問題でも？」

いや、たしかにそんなシーンはあったが、だからといってこの場で自傷行為を黙認する訳にはいかないだろう。いくら相手が自分を

殺そうとした狂気だとしても。

「いい、分かった。君がロボットだってことは十分理解したからそれはやめろ！」

とりあえずその設定は飲み込んでやる。

そのかわり利用出来るだけ利用してすきを書いて逃げる！

「いえ、私はロボットではなくあんのロイドです。ロボットに意思はありませんが、私には明確な意志がございますので」

「そうか、わかった。アンドロイドだな」

「御理解いただけて幸いです。ではミッションを再開します」

「いや、待て！そうだ。どうして僕の命を狙うのかその理由をまだ聞いていない。理由も聞かずに殺すなんて相手に対する礼儀がなっていないとは思わないか」

いや殺すのに礼儀もへったくれないが……

「それは失礼致しました」

こんな苦し紛れにまともに付き合うなんて、案外こいつ馬鹿かもしれないな。

いや、アンドロイド設定だからか？

「あなたが殺される理由についてですが、開発者はこう述べております”一条秀真が存在することです。みんなが不幸になる。こんな奴はいますぐ抹殺されるべきだ”と」

「僕が何をしたらって言うんだ？」

「開発者はこう述べています”お前は、友を、家族を、恋人を裏切り、世界を捨てた”」

「まるで話が見えないぞ！い、意味が分からない。理解不能だ」

「と言われましても……。開発者がその質問に対してはこう答えると予め指定していますから」

「そうなのか、じゃあそうだ。そもそも、君が未来からきたって、その証拠がないじゃないか。それを見せてくれ」

「申し訳ございません。もう時間がありません。ミッションが最優先事項に指定されている為、直ちに実行に移します」

少女は包丁を僕につきつける。

「大人しく死んでください」

「ままま！待て！冗談だろ」

「冗談ではありません！本気です！」

そういうのは告白のセリフで言っただけだった。

振りかざす包丁。僕は一步、一步後へ下がる。部屋の戸の前まで追い詰められた。

と、その時部屋の戸をノックする音がした。

「ちよつと、秀真？秀真？誰かいるの？」

母さんの声だった。そうだ。警察へ通報してもらうチャンスだ。ここは助けを――いや、だめだ。リビングには妹もいる。母さんを危険な目に遭わせる訳にはいかない。ここは自分で乗り切るしかない。

「ご、ごめん電話中。邪魔しないでくれ母さん！」

「あら、ごめんなさい」

うまくごまかした。目の前の電波少女を警戒しながら、部屋の扉の鍵を締める。

ごくりと唾を飲み込んだ。

少女はまた包丁を勢い良く振り下ろした。僕のジーンパンが切れてしまった。ブリーフパンツが頭になる。僕は上の服を脱ぎ捨て、少女に投げつけ、その隙に包丁をうばいとうと、彼女の手をつかんだ。

だが、しぶとい。

いや、少しも痛がっている様子がないのだ。僕は愕然とする。少女はもう片方の包丁を振り上げた。僕の脇腹めがけて、肘を引いて、そして一気に、突っ込んでくる。

気づいたときは、もう遅かった。僕の脇腹に、包丁が突き刺さる。

赤い血がたらり。

「う、あ……」

少女の動きが突然止まった。

包丁はかろうじて皮膚に触れているだけで、まだぐさりと刺さっていない。ちょっと掠った程度の傷だ。間一髪。というところだった。

「も、申し訳ございません。電池……切れです。これ以上の戦闘モード維持は不可能です。支給受電を御願いたします」

少女が包丁を床に落とした。僕はそれを見逃さない。足で払いのける。少女が倒れかかってくる。

僕は両手で抱きとめた。柔らかい腕だ。細くて強く握り締めると俺てしまう位相な華奢な作りをしている。とても、あんな物騒なものを振り回していた腕とは思えなかった。

「じゅ、充電を」

少女は別のポケットから何かを取り出す。電気のコードだ。中央には暑さ二センチのCDケースほどの箱がついており、一端にはマッサージ機の電極のようなものが付いている。

「背中のファスナーを下ろして下さい」

「ななな。何を言っている!」

「今すぐ充電をしてください。さもなければ、ミッションを完了出来ません」

ちよつと待て!何を言っている。ミッションって、僕を殺すことだろ?充電が、なんなのか、何の意味があるのかしらないが、何でこの僕が、僕を殺そうとしている変な女の言う事を聞かなければならないのだ!

「充電って、お前は何をする気だ」

「命令に従い、あなたを殺します」

「んなわけねえだろ!何で殺されるために、殺そうとしているやつ  
の言う事を聞かにならんのだ!」

しかし……少女はクロゼットの方を指さす。そして言う

「あの中に、ノートパソコンがありますね」

「ああ、だからなんだ。ていいうかなんでそれを知っている？」

「新手のストーカーか？」

いくら僕が成績優秀で将来有望なエリートだからって、こんな狂  
気じみたストーキングはゴメンだ。

「C:\Windows\system32\Win9x\sy  
stemfiles:」 このディレクトリに、システムファイル  
に偽装された、あなたにとって重要なファイルが隠されております。  
このフォルダは隠しフォルダ設定になっており、暗号化もされてい  
ます」

何故それを知っている!？

そこには、十三と作った開発中の人工知能プログラムのソースコ  
ードが隠されている。

コイツまさか!

「今すぐ充電してください。さもないと、今すぐあなたを殺します。  
ちょっと雑な方法になりますが」

「意味が分からないぞ。それって、今すぐ殺されるか、後で殺され  
るかの違いだろうか」

「そうですが、今すぐの場合、ここを爆破します」

と、少女はまた別のポケットから、緑色の筒が四つ連なった物体  
をとりだした。そのひとつからは短い線が伸びている。すなわち、  
ダイナマイト? 爆弾? そして導火線。

ライターを取り出す少女。

「ままま、待て! 爆弾!!」

「ここを爆破することによりミッションを達成いたします」

「バカなことは止めろ! 警察呼ぶぞ!!! いい加減!」

「ご心配なく、すぐ終わります」

「ははは、いくらなんでも自爆って!？」

「私はアンドロイドです。ミッションを必ず達成する、使命があり  
ます。ですのてたとえどのような手段を以てしてもあなたを殺し

ます」

やはり警察に通報すべきだろう。

どう考えてもまともなやつではない！しかし、爆弾に火をつけられたら……

仕方がない。ここは相手の言うとおりにして、好機を伺おう。

油断をした隙に爆弾を取り上げ、逃げるのが妥当だ。

「分かった何をすればいい？」

「背中の肩甲骨あたりに、その電極を貼って下さい。続いて、コンセントを指して下さい。一晩ほどで充電は完了いたします」

背中のファスナーを下ろす。少女は髪を長い髪を退ける。背中が  
頭になる、

白い肌。僕はゴクリつばを飲み込むんだ。

「なっ？」

衣服と同じ銀色のブラジャー。ホックが指に触れて、思わず鼓動が早くなる。男子たる部分が反応しようとするが、必死で考えないよう、意識しないようにして制御する。

畜生！！こんな時に欲情している場合か！！

電極を貼り付ける。冷たい肌が触れる。表面は冷たく。少し触れていると肌の温かみが伝わってくる。

「こ、これでいいのか」

「はい、ありがとうございます」

マッサージ器の類だろうか。手の込んだいたずらだろうか。しかし、だとすればこの子は、こんな真似をして一体は何がしたいのだ。冗談やいたずらにしては達が悪すぎるぞ。

「ミッションは必ず実行致します。すみませんでした」

少女は振り向いて何故か頭を下げた。とても申し訳なさそうに。  
いや、しなくていいんだけど。

「ミッションって、君は何故そんな事をするんだ」

「それが、私がこの時代に送り込まれた理由ですから、必ず実行いたします。ご安心下さい」

安心できねえよ！

少女が突如、プラグスーツを脱ぎ始めた。手袋を外し、シャツの部分も全部脱いで、すなわち、前から見ればブラをしているとはいえ、高校男子にはかなり刺激的な格好になる。

「ちょちょちょ！何をするんだ」

「この状態では少し休みにくいので」

振り向く。少女は、恥じることもなく振り向く。

見たい気もしたが、見ようとしたが、慌てて身体を百八十度回転。視界に入らないようにする。

僕には仁絵という、彼女が居るのだ、他の女の子の裸を見るなんて絶対ダメだ。

「いいいい、いいから服を着ろ！そんな格好で男の前で恥ずかしく無いか！」

いや、こいつはアンドロイドなのだ。羞恥心なんて感情は……おそらく持ち合わせていないのだろう。本当に？

「いつものことではありませんか」

「はいっ？」

布団をめくるの音がする。何？

首だけ振り向いて確認すると、少女が勝手にベッドになだれ込んでいた。

「お前！何している」

「電源を切っておいたほうが速く充電できますが、起きていたほうがよろしいのでしょうか」

と言って、少女は起き上がろうとする。布団がずり落ちる。肩が、鎖骨が、そして胸が

「ああああ！やめ！やめ！寝ろ！いいから寝てろ！」

「はい、かしこまりました」

少女はベッドに再び横たわる。そして瞳を閉じた。微妙に横が開いているような気がする。何を考えているんだ？コイツ。



僕はその後数分間ベッドの側で立ち尽くして彼女の寝顔を見ていた。起きる様子はない。

襲ってくれって言ってんのか？

少女は目をつむったままだ。僕は恐る恐る近づく。とても柔らかそうな、薄紅色の唇が、視界の真ん中に飛び込んでくる。少女はピクリとも動かない。

少し濡れた唇。本当に柔らかそうで、

く、キスしたい！

と、僕を誘惑する。

顔を近づける。鼻と鼻がこすれあいそうなくらい近づく。だが、まるで動かない。いや、吐息すらない。

あれ？おかしいぞ。鼻から息が出ていないではないか。

眠いつて居るにしても静か過ぎる。いや、死んでいるみたいだ。

さらに顔を近づける。ゴクリ、つばを飲み込んで、唇と唇が触れ合うまでほんの数センチ。

——ピンポン——

不意にドアチャイムが鳴った。

僕は飛び上がって、驚いて、後ろに倒れる。少女は起きない。

「はい、はい、ちょっと待って」

母さんが廊下を走って玄関へ向かう足音

僕は慌てて別の服を引っ張り出し、それから少し部屋の扉を開いて、玄関の様子を伺う。

「たっだいまー！」

そこにいたのは、茶髪のポニーテール。既になんか背が高いというのに、はやりの厚底ブーツを履いた。姉、一条理穂がいた。

なんだ。姉貴か。僕は安堵して、扉を閉めようとした。

「お邪魔します」

涼やかで可憐な声が聞こえた。

「お久しぶりですおばさま」

「あら仁絵ちゃん。お久しぶり」

仁絵だった。慌てて、部屋を出て扉を締める。

「ひ、仁絵……。どうして、急に、今日？なんで？」

「そこで偶然あったのよ。だから連れてきちゃった。あんたこそどうしたのよ。その慌てよう」

「は？そりゃ急に來たらびっくりするだろ」

「ごめんなさい秀ちゃん。やっぱり迷惑よね」

仁絵は、氣まずそうに、申し訳なさそうに言った。

それはとてもとても愛おしくて、可愛らしくて……。僕はたじろいで「いや、そんなこと……ない」と言うのがやっとだった。

「さあさ、さっさと上がって。ご飯できているんだから」

「そうそう」

姉と母に促され仁絵は少し迷っていた様子だが、僕がうなづいたので彼女はようやく部屋へ上がった。

「で、でもどうしたんだよ急に」

細い廊下で肩を並べ歩きながら聞く。

「電話通じないから、心配になって……」

「ご、ごめん……。昨日電話できなくて。今日も携帯忘れちゃって、家に帰ってみたら電池切れだったんだ。いま充電中」

とりあえずごまかした。誰か、落とした携帯やカバンを警察に届けてくれているだろうか。

いやまて、警察はまずい。あれが一緒に入っているのだ。運良くあの場所にとどまってくれていればいいが。状況からして今抜けだす訳にはいかない。僕はため息を付いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9962y/>

---

The Radicalアンドロイドータミネちゃんー

2011年11月30日21時50分発行